

女性部会

(社)日本臨床衛生検査技師会の諸運営に関する提言書

平成 22 年 2 月 1 日

社団法人日本臨床衛生検査技師会
会長 小崎 繁昭 殿

委員長 原田 佳代子
副委員長 山地 ひろみ
委員 佐藤 圭永
藤浪 朋子
小田辺なお子
江角 智子
担当理事 梶山 広美

我々委員は、平成 21 年 1 月に女性部会委員として召集され、3 度目の提言書作成に臨みました。

ここに日本臨床衛生検査技師会の諸運営に関する提言書をまとめましたのでご報告致します。

【経過】

1. 経緯

平成 17 年度事業計画案に基づき女性部会が設置されてから 5 年が経過した。この間、日本臨床衛生検査技師会（以下日臨技と言う）の諸運営に関して平成 18 年、20 年の 2 度にわたり提言書が提出されている。しかしながら、過去の提言事項が日臨技運営に反映されるには及ばず現在に至っている。

このような中、我々委員は女性部会設置に伴い平成 21 年 1 月 23 日に召集された。1 年間という期間の中で日臨技運営をはじめ女性部会活動についても議論を重ねた。

途中、女性部会主導の公益事業計画がなされ準備を進めていたが、女性部会の権限のあいまいさに加えて、事業を行うための予算措置がなかったことから、他部局との連携がとれず断念するに至った。今回の女性部会作業は、女性部会のあり方も含めて 3 度目の提言書作成に終始した。

周知のとおり、女性会員の割合は平成 20 年度で 64.8% と会員の約 2/3 を占め、加えて平成 15 年から平成 20 年の統計による増加率（平均 0.6%）を考慮すると、今後さらに女性会員は増加していくものと考えられる。この組織率を考慮するとき、女性部会による提言事項は今後の日臨技運営に重要な示唆と意味づけを与えることになる。

今回、我々は日臨技運営の全般に関して 6 回にわたり委員会を開催し、同時にメールでの協議を重ね提言書の策定にあたった。

2. 委員会の開催

第 1 回委員会：平成 21 年 1 月 23 日（金）
第 2 回委員会：平成 21 年 3 月 20 日（祝・金）
第 3 回委員会：平成 21 年 4 月 24 日（金）
第 4 回委員会：平成 21 年 9 月 5 日（金）
第 5 回委員会：平成 21 年 12 月 23 日（祝・水）
第 6 回委員会：平成 22 年 1 月 23 日（土）

3. 策定の趣旨

将来に向け、女性会員の視点・意識を考慮した運営が行われることは、日臨技発展のために必須である。しかしながら、現時点では日臨技執行部における女性理事の割合は低く、将来に向けた指針策定に女性の視点を生かすことは難しい状況といわざるを得ない。

これを改善するためには、組織内に女性会員の活躍の場を積極的に設け意見を取り入れる仕組みを作る必要がある。また同時に、

会員に対して「社会・組織に対する行動と責任の重要性」の意識を高める活動も必要である。これが両輪となり日臨技の定めた指針に向かうとき、5 万人の会員を誇る「会」となり得る。理想的には、特別に性差を意識することなく日臨技運営が行われることであるの言うまでもない。そのためには、組織と男女両会員の成長が求められる。

現状と未来予測を踏まえ、今後日臨技が発展するためには下記の取り組みが必要となる。

1. 日臨技として明確な指針・目標の提示とその履行ならびに会員への浸透
2. 臨床検査技師としての社会・組織に対する行動や責任に関する意識向上
3. 女性会員が活躍できる機会の提供と環境整備

今回我々は、上記 3 点を踏まえて、具体的な方策について検討した。

「女性部会」という名称ではじめられた会ではあるが、現状の運営を考えた場合に早急に対応すべき事項が多いこと、日臨技の指針等を検討する第三者機関注が無いことから、女性に特化した事項のみならず、運営全般についての骨子をまとめるに至った。しかしながら、今回は 1 年弱という短期間での検討のため網羅できない部分があることは否めない。

今後、「日臨技運営全般の指針を検討・履行監督・評価する機関」と「女性会員の活躍を推進する機関」の 2 つの第三者機関を新設（常設とする）し、10 年後を見据えた具体的な運営指針をすみやかに検討・履行し、日臨技組織のさらなる発展を目指すように要望する。

注）ここで言う第三者機関とは、日臨技執行部役員以外の一般会員を主たる構成とする機関を指す。

【提言要綱】

I. 10 年後の日臨技のあるべき姿

II. 課題とその取り組み

1. 地位向上
2. 診療報酬
3. 人材育成プログラムの作成と推進
4. 会員確保
5. 働く女性（男性）技師の環境整備
6. 公益事業
7. 会員意識調査

III. 最後に

I. 10 年後の日臨技のあるべき姿

日臨技運営を考えると、過去データを解析しさらに今後の社会情勢・日臨技組織構成の推移を加味した「日臨技のあるべき姿」を一つの理想モデルとしてプランニングしていく必要がある。ここでは、10 年後の日臨技を推測し、その「あるべき姿」とそこに向かうための手段について述べたい。

日臨技会員は図 1、2 に示すとおり 6 割強が女性であり、過去において男女同比率であった平成元年より徐々に男性会員比率は低下している。10 年後には 8 割が女性会員で占めると予測できる。

< 図 1 > 日臨技男女会員比率 < □ 女性・■ 男性 >

